『正法眼藏嗣書』の傳承とその思想的意義

横　井　覺　道

一　日本曹洞宗下の「嗣書」について次の事柄があることは周知の通りである。すなわちここに掲げた「正法眼藏嗣書」あるいはそれの寫本としての書名と、一般に「お嗣書」と尊稱するところの永平高祖が天童如淨禪師から授與され來つた傳法を證する室中の祕書としての「嗣書」と、今一つは宗侶が傳法嗣法の儀式に師僧から授けられるところの「お嗣書」である。道元禪師授受の「お嗣書」は、現に國寶として指定され、永平寺寶庫に祕藏されており、一般宗侶が相承したところの「お嗣書」は言うまでもなく各〻の室中に祕在する。然して『正法眼藏嗣書』は、右の「お嗣書」が單なる物件ではなく、釋尊以來嫡々相承の正法眼藏そのものを象徵していることを開示せらた書物である。かかる「正法眼藏嗣書」卷が、ある時代、ある人師によつては必らずしも高祖の文證として、或いは意義において妥當なものではなく僞作ないしは添加を含むものとして唾棄すべき云々という所說がなされたものである。尤も今日においては道元禪師眞筆本が發見され現存した事がしらされており問題の起きよう筈はないのである。が、尙殘るところの宗學思想史の上で大きな地位を占める天桂和尙乃至その影響下のあり方を糾す便にしたいというのが本論の目的である。

二　天桂和尙は正法眼藏の「面授」と「嗣書」の二卷を斥ける根據と主張を次の如く述べている。

夫雲禪師永平嫡孫、中興五世、宗祖時世去已不レ遠、七十七年而所レ編二集正法眼藏六十篇一、其中無二面嗣一篇一、蓋不レ聞レ有二雲師前程此書之排纂一、則直是古佛染翰眞本也、古代所レ寫永昌、洞雲、瑠璃光、泉福寺等本、自二何處一得來耶、老僧頗疑レ之耳、或雖レ有下由二雲師本一繕寫者上、皆悉烏焉羊芋之誤不レ些、是以今已向二五百年一、無レ有二言レ之者一、噫時乎時哉、如レ是宗乘不レ能流二通之一、至若沒鼻孔族謂二之祕書一、閣二在無事甲裏一、爲二蟲鼠一所二蠹蝕一悲哉。(1)

これによれば、敢えて諸本の傳承を無視して義雲和尙の六十卷本に根據をみているのであるが、それは、ためにする立場から出たもので中正な意見とは認めがたい。因みに和尙が根

據とする六十卷本の編集態度と、その中に面嗣二卷の脱落は、面山、萬仞の兩和尚が傳えるが如く官本上納の爲にした編纂に依ることであれば、或いはそこに天桂和尚と意圖は異なるが相通ずる消息があつたかも知れない。が然し、相似が直ちに同軌とは申せぬ事柄は他にも多くある。然も諸本に面嗣二卷の傳承を認めた上からは、むしろ問題は天桂和尚の「決是盲禿子の妄添なり、――悲哉面嗣兩篇如レ是疑怪者頗多矣云々」と言つて「實是古佛の自己を面授との玉ふ、示誨に背馳するものは、宗乘を敗績する魔外なり云々」[2]という思想のありようから省みなくてはならぬ。これに對して卍山老人が「一一認二其妄見一爲三自心證契一云々」[3]と反駁している事は餘りにも有名である。然し尚その說示に足らざるものがある爲、面山和尚補つて「衣袈詔二諛濟家之輩一。而叩與レ我混焉。夫如二我之嗣書一。則正法眼藏中有二嗣書卷一。而謂二曹溪嫡血一。何與レ彼混。其道理則天地懸隔云々」[4]と宗義の區別の上からも解いている。その道理から別處では「理ハ式、式ガ直ニ理ナルワケヲ參究スベシ」[5]と諭している。萬仞和尚に至つては「マスマス叮寧ナラザレバ正法滅却スコトヲ」[6]と深理の上から憂えている。然し以上をもつてしても一部天桂下の面嗣二卷妄添の疑を晴らすには未だ十分とはいえない憾があろう。否むしろ宗乘的觀念からみた一見解であるという謗りすら殘そう。が「嗣書卷」の眞筆本が實は今にして發見され世に明らかになつたのではなく、當時天桂和尚自身祕かに高祖の眞筆本を拜覽する結緣があつたと案ぜられる蹤跡がある。尤もこの眞筆本は、いわゆる『里見本』ではなく香積寺本の「切」である。

「香積寺本」とは、三原の香積寺所藏の高祖眞筆「嗣書卷」切に因むもので、寛永年間に清源院安叟自穩上人の手によつて二十六ヶ處に分施せられたものの斷簡と、分施に先だつてなした臨書と、分施經過の備忘「書永平開山高祖嗣書卷後」からなるものである。[7]今の問題に關連する事柄として、右、備忘の記錄に永平寺頓叟を始め、丹波隨岸寺萬安、加賀大乘寺月舟、隨岸寺の懶禪和尚などを含む時代の有德あるいは居士の名を連ねて分施先を明らかにしている。

このうちの萬安和尚は言うまでもなく興聖寺の中興五世であり、懶禪和尚はその六世である。七世には龍蟠松雲が出た。天桂和尚は、寛文七年丁未に參洛してこの龍蟠に隨身している。[8]この頃なお懶禪は世にあつた。從つて現に興聖寺に寶藏するところの二切には接する機會が十分にあつた筈である。少なくともその確在をしらされていた事は、あれ程の機鋒峻峭をもつてならしながら「嗣書卷」そのものの存在を否定し得ず、僅かに己見に滿たざる箇處を妄添と批したに過ぎない經過は、この邊りの消息によつた故ではなかろうか。因みに宗統復古の梅峯老人は龍蟠の後住で興聖の八世である。

且つこの章の終りに附記しなくてはならぬ事柄として、前述せる「六十卷本」の底本は「七十五卷本」を底本にした編集であることは今では明らかなことを記して次に移りたい。

三　宗門室中の傳授に三物がある事は周知の事柄で今更説明を要しない。その三物以外にも「切紙」と稱せられるものが室中によつては傳えられてをり、またその種類は極めて多い。永久博士の紹介された一例[9]に、山口縣の關雲寺の「通幻派石屋覺隱傳授切紙」というのがある。寛文第八戊申歳、前永平天德六世寒叟が記し殘したもので、佛袋五十二通、法袋五十六通、僧袋五十三通、合計一百六十一通がある。なお「切紙」については面山和尚も『洞上宗內斷紙揀非私記』一卷を撰して意見を述べているが、右の關雲寺切紙の上に、第十一と十二は傳授の作法、第十三は嗣書要儀、第十四は嗣書作合血の證があつて、然もこの第十四は內容から見て正法眼藏の嗣書の卷と大體に於いて內容が一致しているという事である。然してこの切紙の外に通幻和尚の人事とか、十哲の付授物とか稱するものがあり、宗門の教育的見地から見ても極めて興味深いものを列記しているが、その中にも『正法眼藏嗣書』の授受を明らかにしている。さてかかる『正法眼藏嗣書』の傳承を明らかにしたのであるが、その授受の古態を維持したものを、岸澤老僧は入手していた。すなわち題して『長祿本』と『永祿本』と稱する二本がそれである。一行の字數や行數も「眞筆本」と異なつた寫本であるが、表題に「嗣書」とのみあつて「正法眼藏」の總題を冠しないことや、中題の「嗣書」を別行で認めていることは眞筆本、香積寺本に同じであり假名が變體假名から片假名に移されてはいるが、その文言は草稿本とみて差支無い香積寺本は暫らくおいて眞筆本の原型を良く傳えている。ところで長祿本はその奥書の識語に「寛元元年癸卯七月廿六日以越州御書御本交之／建長七年乙卯二月廿四日於永平寺首座寮書寫之畢／義鑑又交一校畢／應永拾陸年姑洗三日傳畢／干時長祿元年丁丑八月日於龍文室內傳授畢（以上一筆）　干時應仁二年戊子十二月八日於大寧室內傳授畢」とあるから次の樣子がしらされる。先ず第一行の御本交之というのは、永平寺二代の孤雲禪師書寫の消息で、次の義鑑すなわち三代の徹通和尚の校合を物語る。『御遺言記錄』によれば建長六年十二月二十三日に師の孤雲より嗣書傳法の記錄を示され[10]、あけて七年の正月二日に入室、翌三日に嗣書ならびに傳衣のことを示され、同十三日に「嗣書」を拜覽、然してその翌十四日嗣法、從つて嗣書卷書寫の二月二十四日は嗣法後という事が明かにされる。次行の應永拾陸年姑洗三日は應永拾六年三月三日という事で、傳畢も次の行の傳授畢とは言うまでもなく印證としての意味を含む故、ここに署名がなくとも「大寧寺室內云々」を遡つてみれば、龍文寺開山の竹居正猷和尚を經て石屋眞梁に至ることは明らかとなる。

なお石屋和尚の年譜を探つてみると、この竹居和尚への傳授は總持寺の室中に該當する。次に「大寧寺云々」は當然大菴須益をさすことができよう。大菴は初め竹居につき、次で法嗣の器之爲璠に嗣法した。時に寶德元年己巳六月初一日で『續日域洞上諸祖傳』によれば同じ日に「以二所傳法衣并從上相承圖樣等事件盡數一付畢」と記している。[11] 應仁二年の丁亥は異墨添加の誤字で戊子が正しい。因みに大菴は瑠璃光寺本で有名な周防の瑠璃光寺の開山である。全巖東純はその二世である。

次に永祿本であるが、その識語は次の通りである。「(前略)建長七年乙卯二月廿四日於永平寺首座寮書寫畢／義鑒一授了／傳與閻藏主／長祿三年己卯二月廿九日　愼終判／傳與雲藏主　宥閻判／付與勤藏主　智雲判／付與長索　宗勤／付與禪等　長索判／付與宗印　禪等判／付與宗淸　永祿二年二月十五日宗印華押／付與智峰　元祿五壬申正月十八日秀暾／付與白峰　享保五庚子三月廿六日　智峰」とある。法系はやはり石屋派にして竹居とは法眷の覺隱下である。尙この傳承と全く同じ識語の本がやはり瑠璃光寺にも傳えられている。この他で知られているものでは、大本山永平寺の寶藏に「嗣書」と署し、三寶印がおされその下部に「緣思宗之抄／同有嗣書」と認め、左柱に「□□訣」とある蠹蝕で讀めぬ文書がある。「緣思宗」とは宗門の切紙に同じで、內容は關雲寺傳承本に通ずるものである。次に豐橋の全久院に二世光國舜玉和尚筆の眞字本の嗣書卷が納藏せられている。その識語には高祖から八世の法孫大洞如仲から「乃至嫡嫡正傳來云々」と「傳付舜玉首座」に至らしめ、「日本永正十二季乙亥八月十二日傳法沙門舜玉拜納」としてある。

以上、室內の傳承をみてきたのであるが、これらは何れも宗統復古の運動を契機に見られなくなるのは、それはそれなりに筋目は通るものである。最後に現代の宗師家である岸澤老師は、天桂和尚のかかるあり方に對して「一は格外をとき一は塵中をとき、二卷そろふたところで宗乘を圓滿するだ」と糾し、その宗旨を高祖の「證上に萬法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり、その超關脫落のとき、この節目にかゝはらんや」というを引いて證明としていられるが、[12]『正法眼藏嗣書』傳承の思想的意義を表わしたものとして高く評價せられなくてはならない。

1　眼藏註全書第七卷一一〇頁。2　同書一五〇頁。3　曹全書室中一二七頁下。4　同書一九五頁下。5　同書一七二頁下。6　同書一五六頁上。7　宗學研究第四號有木環山師、地方に遺在する宗史資料の研究參照。8　曹全書史傳下、退藏始祖天桂和尚年譜參照。9　大乘禪第二十八卷第六號所載論文。10　曹全書宗源下二五七頁下、以下。11　同書史傳上一一二頁上。12　正法眼藏現成公案卷葛藤集三二五頁。